

## 市場移行国の金融問題 - 中央アジアを中心に -

早稲田大学 北村歳治

旧ソ連邦崩壊後における中央アジアの金融改革が始まってから 10 年近くが経過した。中央アジア 5 カ国は、国際機関等の支援を受けて、早い段階から通貨制度と金融取引ルールの枠組みに取り組んだが、金融仲介機能は依然として確立されておらず、また、決済機能も整備されている状況とは言いがたい。さらに、金融の基層となる自国通貨は、いまだに十分な信認が得られていない。

市場移行国の金融・為替問題を検討する場合には、隠然としたインフォーマル経済の大きな存在、金融と財政の未分離、物価等の経済・金融データの欠陥等の問題を看過できない。これらの問題は、程度の差こそあれ、中央アジア諸国には共通している。また、ウズベキスタン、トルクメニスタンでは、依然として複数為替レートが国際金融関係者の間では攪乱要因として残っている。こういう状況下で、米ドルは国内経済の中で潜在的に大きな役割を果たしている。一方、証券市場は、遅れた銀行セクター以上にさらに遅れた状況に置かれている。

したがって、金融サービスは、経済全体の一部をカバーしているのに過ぎず、先進諸国に比べてその役割はきわめて低い。要するに、中央アジアの金融機能は、いまだに受動的かつ閉塞的である。クレジット・カード等の新しい金融サービスの議論もないわけではないうが、金融のインフラストラクチャーが未成熟の状況下では、表面的なものに止まざるをえない。

上記の諸問題を「金融・為替」の視点から、システム論的なアプローチで、構造的側面、情報的側面、及び金融サービスの成果的側面に焦点を当て、金融・為替問題の背景を探るとともに、今後の展望を図ることとしたい。